

『大福／富突始』翻刻と紹介

松原 哲子

『大福／富突始』は安永四年（一七七五）刊行の三冊物の鱗形屋板草双紙である。作中署名から鳥居清経が画者だとわかるが、作者は不明である。同年同書肆より刊行された『金々先生栄花夢』の登場を機に草双紙を黒本青本と黄表紙とに区分する通念にしたがえば、本作は黄表紙に分類される。ただし、鳥居清経を画者とし、作者の署名を有しないことや、作風から、『金々先生栄花夢』登場以前の、伝統的な草双紙の流れに位置する。また、『金々先生栄花夢』に代表される、新規参入の作者による、従来とは異なった作風の草双紙に影響されずに生み出された最末期の作品のひとつといえる。

『黄表紙総覧 前篇』（棚橋正博著、日本書誌学大系四八（一）、青裳堂書店、昭和六十一年）では、本作の梗概を示した上で「清経一流の銜学的付会説を述べて教訓色を添えている」との評を加えている。しかし、鳥居清経が画工をつとめた草双紙の物語の執筆は、画工とは別の、おそらく板元毎に異なる作者が存在したものと想定され（一）、『黄表紙総覧』が指摘するところの、本書にみえる「銜学的付会説」を示した「教訓色」は、清経に起因するものではないといえる。

よって、清経が画工をつとめた時期の草双紙について内容の傾向を捉えるには、画工毎ではなく、板元毎に整理・検討をすべきではあるが、本作が恋川春町に代表される新しい作者とは作風が異なり、従来の草双紙の特徴がよく表れているという点は肯ける。

安永四年以降に草双紙刊行に関わった、新規参入の作者によって形成された、いわゆる黄表紙の時代には、様々な作品で、自分たちの作品が時流に乗っていることを誇示するという趣向が取り入れられている。その方法として、前時代の草双紙である赤本や黒本青本との比較が盛んになされたが、前時代の草双紙の端的に表すものとして取り上げられたものに、言語遊戯の語句の利用が挙げられる。

例えば、天明四年（一七八四）刊『従夫以来記』（竹杖為軽作、喜多川歌麿画、鳶屋板）に「丈阿がそうしに大木の切口でふといの根ときてがてんかく」など、申はいたつての古ぶんじて「享和二年（一八〇二）『稗史憶説年代記』（式亭三馬画作、西宮板）に「○赤本時代の詞くせを早く覚ゆるうた△大木のはへぎはときてふとじるしてんとふといの根じやふてらこい」との記事がある。他にも同様の例が複数存在するが、いわゆる黄表紙において、特定の語句が黒本青本（「丈阿がそうし」は宝暦・明和のころの、丈阿が画工をつとめた草双紙）や赤本を特徴づけるものとして趣向に採られたことが確認される。

しかし、黄表紙の中で、赤本や黒本青本といった前時代の草双紙全般と結び付けられている言語遊戯の語句を、実際の初期草双紙の中に探してみると、多くは鱗形屋板に限って使用されるものであり、年代も鳥居清経が画工をつとめた時代、宝暦期後半から安永期のものである⁽²⁾。

恋川春町画作の『辞闘戦新根』^{（こいまたかひあたらしいのね）}（安永七年刊、鱗形屋板）には、登場人物として十種の言語遊戯の語句が採用されている。本作は、後の黄表紙の中で言語遊戯の語句を時代遅れなものとして趣向に採る手法が定着するにいたった要

因のひとつであったと考えられる。前述の通り、言語遊戯の語句は鱗形屋板の草双紙においてある程度の期間確認できるものである。よって言語遊戯の語句を前時代的なものとして位置づけることは概ね妥当だと評価できる。但し、『辞聞戦新根』に採られた言語遊戯の語句をひとつずつ見ていくと、長きに亘って刊行された伝統的な鱗形屋板草双紙の使用例の中から主だった例として選ばれたのではなく、特定の時代や特定の作品の中から採られたのでないか、という印象を受けるものが含まれている⁽³⁾。

『辞聞戦新根』執筆にあたって、特定の取材源があったと仮定した場合、その候補として挙げるべき作品のひとつが、『大福／富突始』である。本作には、物語の本筋に深くは関わらない、ちよつとした面白味を読者に提供するものとして以下のような言語遊戯の詞章がみられる（適宜漢字・句読点を当てた）。

「今朝から楮を敲くのに、せめて一杯も飲ませぬ。身銭を出してはあわすの松原。」

「黙って敲け。晩にはきすごけにするぞ。」

「後は半切であらふ。おいらはどら焼きと出たいものだ。」

（八丁裏・九丁表）

↓全て紙漉き職人のせりふ。「あわす」は「合わす」と「栗津」を掛けた洒落。「きすごけ」は酒の意。「半切」は半切紙を指す。くたびれたので酒や甘い物が欲しい、という場面。

「この後では御吉例の鯛のみそずで四方のあかを聞こし召ませう。」

↓「鯛のみそず」は鯛の味噌仕立ての吸い物。「四方のあか」は四方屋の酒を指し、鱗形屋板の草双紙に頻出する。酒肴と酒の組み合わせた例。「鯛のみそず」と「四方のあか」の組み合わせは、いわゆる黄表紙の時代には前時代

の草双紙を象徴的に表すものとして散見されるが、実際の初期草双紙においては様々なバリエーションの一種にあたる。

「上下万民飲みかけ山でござります。」

(十丁裏)

↓村上帝からの「世間の様子はどうか。」との問に対する能因法師の答え。

「我らも今年から金銀取込帳といふを頼みましたいと、かくなまをためねばならずの森のほととぎす」

「そんなら四方のあかを飲みかけ山になされて。さあ〜」

(十二丁裏・十三丁表)

↓大黒屋の、客と店の者とのやりとり。「なま」は現金の意。「ならずの森のほととぎす」は「ならず」と「糺の森」を掛けた洒落で、上方で発生した語。

この他に、作品冒頭の序文末尾に、読者に呼びかける「がてんか〜」の語も見受けられる。

先に挙げた『稗史憶説年代記』『従夫以来記』の例などを見ても分かるように、いくつかの言語遊戯の語句は、いわゆる黄表紙の中で、大きく時代的に隔たりのあるものとして趣向に取り入れられているが、実際には安永ごろ、黄表紙の草創期にあっても、読者を楽しませる趣向のひとつとして利用され続けていたといえる。

本作のような黄表紙草創期における従来の伝統的な草双紙のあり方を知らないままで、草創期の黄表紙を担った作者たちの作品を正しく理解することは不可能であるものと思われる。よって、本稿は、原資料の実態を裏付けとして草双紙の歴史展開を整理した上で今一度いわれる黄表紙時代の主立った作品を再検討していくための材として、本作

を紹介するものである。

注

(1) 拙稿「草双紙における流行語の位置」(『近世文芸』第六十八号、平成十年六月)参照。

(2) 注(1)に同じ。

(3) 拙稿「草双紙の洒落言葉(一) ―ならずの森の尾長鳥―」(『実践国文学』第九十号、平成二十八年十月)

・「草双紙の洒落言葉(二) ―どらやき・さつまいも・鯛のみえず・四方のあか―」(同第九十一号、平成二十九年三月)

参照。

付記 資料の影印・翻刻紹介を御許可いただきました都立中央図書館に深謝申し上げます。

【翻刻】

凡例 文・文節・単語の切れ目に適宜空白を入れ、登場人物のせりふについては各々()内に話し手を示した。

上巻

(二丁表)

正月せうがつ元旦げんたんに服する所のせんしせんし茶ちやを大福だいふくといふ 十一日じゅういちにちの蔵くらびらきに書しよする筆ふでを大福帳だいふくちやうまことに長者ちやうじやう富ふにあかずとか

や申 その一の富いちとみのはじめをのぶること誰たれとても望のぞ給たまわん事しれし 御事をんこと此このそうしを見て

がてんかゝ大叶

(二丁裏・二丁表)

そのかみひごのしんじといふ人かどうにめいよなり ちやうのうよりたゝのまへにてくるまそんじとりかへをとりにやるうちはじめたいめんしかどうのでんじゆをかう わかはいかゞしてよむべきやてうのうべつのしさいなしとてこゝろがけの一しゆをよめり

〽山ふかみおちてつもれるもみちばのかわけるうへにしぐれふるなり

これよりてうのうをしとする のちによをいといしゆつけしてのういんほうしといふとかや

のういんがいわく今日げんざんのしるしにみせたてまつるものありとてかいちうよりにしきのふくろをとりだしそのなにかんなくづを一すじいだし是はながらのはしのかんなくづなりといふときてうのうもきゑつして同じくくわいちうよりかみにつゝみしものをとりいだす みればかれたるかわづなり これはいでのかわづにてはべるといふ たがいにかんゑつしておのゝくわい中へおさめてわかれける 此りやう人がぐといひ こころがけのほどおもしろし

(二丁裏・三丁表)

あるさむらい なにとなく六はらてうへ千たびまいりを二としたりけるがほうばいのさむらいとすこ六をうちて大ぶんまけたり わたすものなきまゝにわれ一せんもなし 六はらへ二千どまいりせしがこれをわたさんとあざむく

それ一だんなり しからはとて一ひつかきてわたす おとこはこゝろでおかしがりける そののちこのまけたるさむ
らいはおもひよらぬことにてとらへられる うけとりたるさむらいはおもひよらぬひぢよをゑてつまとせり
それわたせといふ

(朋輩の侍)そこもにかしたはとつもんめとつふんとちりんとちもうの代に二千とまいりはふそくなれどもうけと
りませうぞ

のういんかたはらにいてみ給ひしかはたしてしかり これくわんをんの御利やく也

(能因法師)あのわたしたやつは大きなひかてうかな うけとりしおとこはくわほうものかなく

(三丁裏・四丁表)

それわかはそのはじめひさし えんぎの御とききのつらゆきにめいじてこきんしうをせんぜしむよりむら上天
わうことにわかをこのんでもつともそのみちにたつし給ふゆへときによりうど大なかどみよしのぶみなもとのし
たがふきよはらのもとすけきのときぶんさかのうへのもうちにめいじてごせんしうをゑらまる、やうかうこのみ
給へはかじんはなはだお、し

一じやうのいんのときふじはらのきんとうしういしゆうをゑらみしらかはのいんのときふじはらのみちとしご
しういをゑらみすといんのときみなもとのとしよりきんようしゆうをゑらみこんゑのゐんのときふじわらのあ
きすけしくわしゆうをゑらみこしらかはのいんのときふじわらのとしなりせんざいしゆうをゑらみそのちみな
もとのみちともふじはらのありいへふじはらのいへたかふじはらのまさつねにめいじてしんこ
きんしゆうをゑらむ 古今こきんよりこれまで八たいしうとがうす

(四丁裏・五丁表)

そもくちやのはじめは天ぢくのきばこれをせいしてのみはじめその、ちもろこしかんのよのりくうもつはらもてあそび日本にてはとがのをめうゑ上人きてうのときにちさんし給ふべつしてひがし山よしみつお、ちの介にめいじてうへしめ給ふ

うぢはめいぶつのもと也　うぢはちやのめいぶつにして大ごく上々吉のちやところ也　はつむかし今むかしのちむかしなど、むかしといふしをつけること大ひち也　四月廿一日をちやのつみぞめの日なり

ある人のいわくもろこしのめいるへんじやくといふ人のびやうよりちやはくゆるといふ　へんじやくはたちのとしするゆへにちやといふ字は甘はたちの人の木きとかくといふ　ちやのこしらへやうまづつみてむしあげてしばしむしろのうへにもみそろへほいろにかけてほしあぐる　みな女をのてわざなり　たゞし廿一日とかいてつぎあわすれは昔むかしといふじにかなふゆへなり

(五丁裏)

あふみのくに、めのうときらうぢよひたすらほとけをねんしけるがむらのわかいものあのばゝがめもみへぬにほとけをわきへとのけほんぞんにいわしのかしらをさしてば、におがませんといふ　これ一たんしるへしといふのういんそのかたへにやすみたちぎ、し給ふ

(村の若者一)おば、へこくめにあるいわしをまいらせん

(村の若者二)これはよいおもひつきじや

(老女)やれこしいたや　ア、なむあみだく

(六丁表)

むらのものくだんのごとくしつらいをく　ば、はゆめにもしらずふしおがみける
のういんむちのもの、あとにつきてきたりきねんし給へはふしぎやさもなまぐさきいわしのかしらよりごかう
さしてみへける

みなくふしぎなり　さてはいつしんにまことあれば也とかんじける　いわしのかしらもしんくからとはこの
ことなり

(村人)これはふしぎじや　こちとらがはめにつきごめやときたは

(六丁裏・七丁表)

かくてのういんうたしゆきやうしてしよこくへわたり四こくのうちいよのみしまにわたるおりからすげつのか
んばつに百せうはかうさくにうみつかれあまこひのいりもきかずなんぎせし所にむら中にさかしきもののうい
んをたのみてあめのいのりをねがふ

そのときしん中にきねんして三しま明神へあまこひのうたをたてまつる　へあまのかはなわしろ水にくみなかせ
あまくだりますかみならばかみ明神かんのうふましくて一天にはかにくろくも大あめしやじくして三日三や
やまずしてくさきをうるほす

(村人)ねがはくはあめをふらせたび給へ　きめうてうらいく

これのういんがうたのきめう　これにかぎらず

(七丁裏・八丁表)

のういんあめをふらして うたのきづいあらわし給へば いよ一こくはいふにおよばず 四こくこそぞつてこれをかんじける あまごひのうたの礼とてむら／＼でもちをついてのういんをもてなしける うたのちんなればとていまのよまでももちのことを歌賃かちんと申はこのいわれなりとかや

さてとうりうのうち せうやかたへのういんをせうじ こじだん または百せうのためになることなどものがたりし給ふ

のういんのいわくそれしゆみせんのかきこと 十六まんゆじゆんのめうかう也 それに三がいあり よくかいしきが いむしつかいなりととき給ふ しもはこれをりやくす それよりしてにんげんのふだんもてあつかうきふつと うのはなしにうつりくわくはそんなしのめうとても、あとをみてそのはじめをしるわざなり

たとへば御くじをとるに こよみをみてその日の十かん十二しをひきあわせてとらねば みなちがふなり ひとをとりとつるそうだん またはむじんかうぎやうのしよくわいにその一ざの人くさみしわぶきすればそのことと、のわずししやくてつきをすへば 大こんぢわうのやくりきをなし給ふ 天ちきんかうの二ツあつて人におのづからあいくちふあいくちありとかたり給ふ そのなかつてんちけんこんのこと何ことによらず くわしくかたりしはらくとうりうし給ひてまた／＼りんこくへわたり給ふとぞ

(八丁裏・九丁表)

古きんしう ゑんごせうにいわく かみや川はひらのめうじんへまいるときわたるはしなり このところにてかみをすきはじめしなり べつしてむらかみていはなにことも御けんりよふかければ つしよのかみにめいじてきんり

のしよかみをすかせ給ふ しゆくしとてそのいろすすみなり ぞくにうすすみのりんしといふかみこれ也 かみをすくわざはかうずをたきとろろのしるをあわしてみつに入ひをべてのちにかすをさりてあさはこに入てちいさきたけ^(判断不能)□□てこれをすくいいたにほしつけかはきてのちはしをたちてかみとするなり

(職人二)けさからかうつをたゝくのにせめて一はいものませぬ みぜにをだしてはあわずのまつばら

(職人二)たまつてたゝけ ばんにはきすごけにするぞ

(職人三)あとははんきりであらふ おいらはどらやきとでたいものだ

(九丁裏・十丁表)

せぞくにぐはんとんにふくするところのちやを大ふくといふ事はじつは王^{わう}ふく也 そのこゝろはむらかみていみやこ六はらてうのほんそん十一めんくわんをんをしんきやうし給ふ あるとき御なふの事ありていやくしるしをうしなふ よつてとうじのほんぞんをねんじ給ふ しかるにれいむあつてほんぞんへくするところのてんちやをふくして御なふへいふくし給へり かるかゆへにまい年ぐわんたんにはとうそのくうちやをめしてふくし給へりしかればしゆせうのふくごするをもつてわうふくとせうじてしやうかこれをふくすとうんく いまにいたつてこれをゑてびやうくをのそくものおゝし

(袖印「川」の男)このあとでは御きちれいのたいのみそづでよものあかをきこしめしませう

(十丁裏)

むら上ていのういんがこときこしめしたいにめされなんぢがうたしゆぎやうのありさまさぞおもしろから

ん ものかたりせよとこれよりゑいりよに出来ないおり／＼さんだいしておとぎ申されける

(村上帝)なんとおぼう このごろせけんになにもかはつたせつもないか きかまほしや

(能因法師)いやはやいつにかはらぬほうねん 上下ばんみんなのみかけやまでござります

(十一丁表)

のういん つのくにみのをさんべんざいてんにもうでつや申所にやはんはかりにしんでんうごきわたりしんちよくにいわくなんぢきたることよきかな／＼ われをしんするもにふくをあたへん とみつきとかうして 一二三のまもりをあたゆべしと也 いかのにういんわれをしんするともがらに大ふくをあたゆべし なんじせいそうなれば よきかな／＼

(十二丁裏・十二丁表)

のふいんはかがくしやなればとてある人みやこきたやまならびかおかといふ所あり 一のおか二のおか三のおかとして三ツのおかならへり

こだいのそうしにいわくならびかおかのうちにたからをうつむ所あり そのゑいかに

あさひさしゆふひうつらうなか
あさひさしゆふひうつらうなか
朝日佐志夕日宇津羅丘の山漆千桶金千桶

これすなわちしよさいをかくすくふうをなしてしるべきのいわれなり いかゞの事にて候ぞととふのういんしばらくくふうしてこれべつのしさいなし このやまのはんふくにたからありとみへし うるしといふじは七のじ也 此やまなかに七千両のこかねをうづめをくと人の心をまとはすのそらごとなりとの給ふ 大むかしよりこの

ことたれもけんもんする人なしとかや

(十二丁裏・十三丁表)

正月十一日を町人はてうとちとてことのほかいはいうはがきの大福帳の事 これも大ぶくのちやよりいでゝい
わることぶくでんなり しんごんにてはもつはらくらひらきしんごんのみつぞうをひらくとていはふなり ざ
いりにては此日あがためしのじもくとてしよこくのつかさをめしてそれ／＼にんくわんをたまはる あがため
しとはもろ／＼のさいく人草子やかゞみやなどにそれ／＼にじゆれうをたまわるひなれはとててうやも大福帳
のうはがきするなるべし

(客)われらもことしから金銀とりこみてうといふを たのみましたいと かくなまをためねば ならずのもりのほとと
ぎす

(大黒屋の者)そんならよものあかをのみかけ山になされてさあ／＼

折手本

手帳類

大福帳

くわいし

色し

大黒屋

大福帳

萬覺帳

金銀出入帳

覚日記

(十三丁裏・十四丁表)

のういん べんざいてんの御むそう ありがたくおもひすなはち そうもんしてちよつきよをかうむり みのをさんにおいて 三番のとみつきを かうぎやうせり これ 日本とみのはじめ也 一のとみの御ふだ 大ふく也 まれにあたるものはしあわせものなり

(能因法師)第一ばんくろだむらの小左衛門 大あたりく さてもく しやわせかなく

しかれども 一ばんいくら 二ばんいくら 三ばんいくらなど、のほうびはなし たゞ一のとみは大福 二のとみは中ふく三のとみはそのつぎのさいわいにあたるなり べんざいてんより あたへ給ふふくなれば 金のほうびはあるまじき事也

(能因法師)第二ばんくわだ介之丞 大でく さぞよろこびでござらう ちんてうく

第一の富

第二の富

富

(十四丁裏・十五丁表)

さんしうかしうせつしうは申におよばすそのきんごくなん千里となしに御とみのふだを入れて三ばんのうちにあればその御札をたけのさきにつけとちうやすみなしにそのとみのあたりぬしのいへにはせつくなり

もしどちうにてくたびれをやすめんとてみづちや屋などにこしかけてやすめばおふたのふくぬけいでそのみづちや屋のふくとなるゆへたつしやなるおとこ四五人くみあいそのおふだをたけのさきにつけてゑい／＼こへしてぢさんすることはやひきやくのことし

(袖印「半」の男)こちとらは三のとみじやからちとおそくもとつても大じあるまい

(袖印「平」の男)そうとも／＼いつそくたひれあしにこゝにとまろうか

(一ノ富の札を運ぶ男一)あいつらはよく／＼のびかてうめら おふだのふくのぬけたることもしらない それにつけてもいそげや／＼

(一ノ富の札を運ぶ男二)がてんじや／＼

(水茶屋の前を通りがかった男)ふくがぬけるは／＼ ふくがおかげでさぬけたとさ

三ノ富

一ノ富

福

(十五丁裏)

たんごのくにきれとのもんじゆにきんどうじといへるわきだちあり これをかいとうすること百文なり このど
うしちゑのはこといふものをいたきてたゝせ給ふ おろかなるものはこのどうじのちゑをもらふてくるやうにお

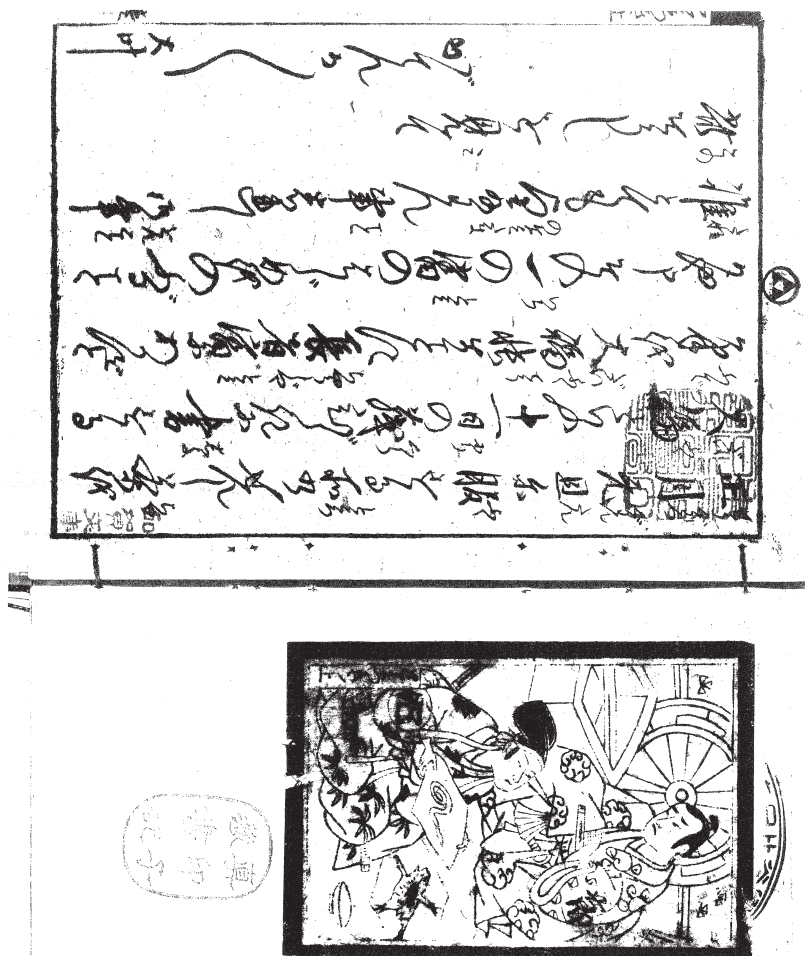
もひぬ そのみうまれついでのもふんべつはもんじゆのちからにもならぬことぞかし ちゑのはことなづけてみ
せさせ給ふはしよあき人そのいへくのちやうばこ也 年中うけはらいをゆだんなくこゝろにかけよとのみせしめ
なりとかや

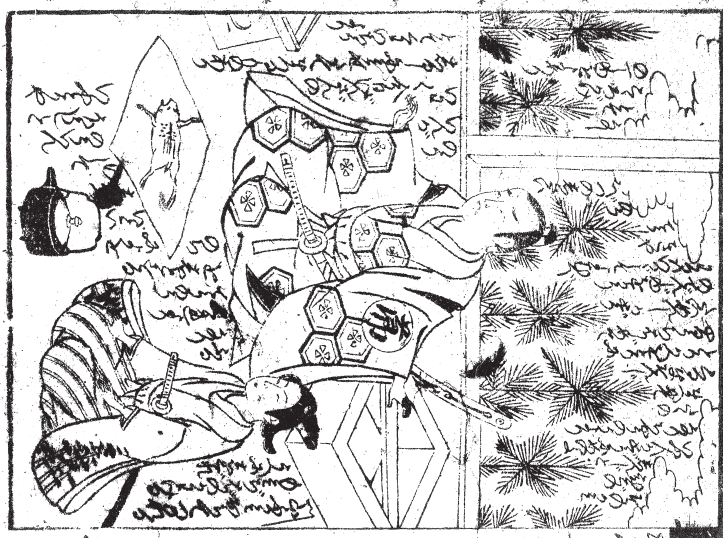
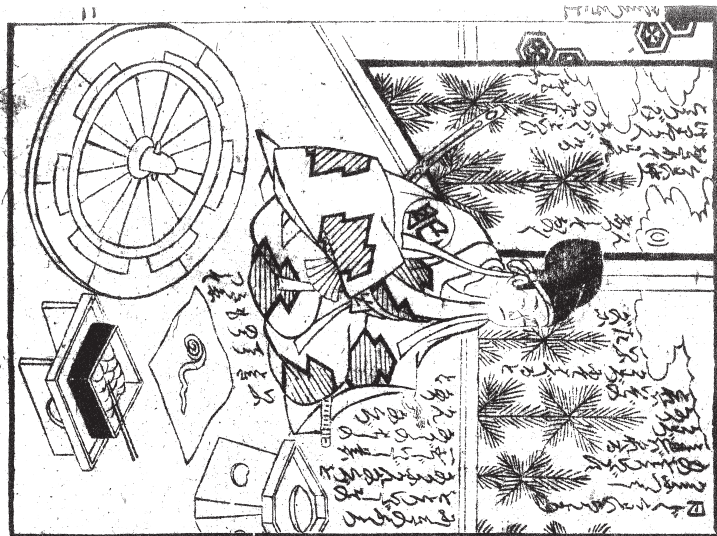
鳥居清経筆

【影印】 都立中央図書館加賀文庫蔵。

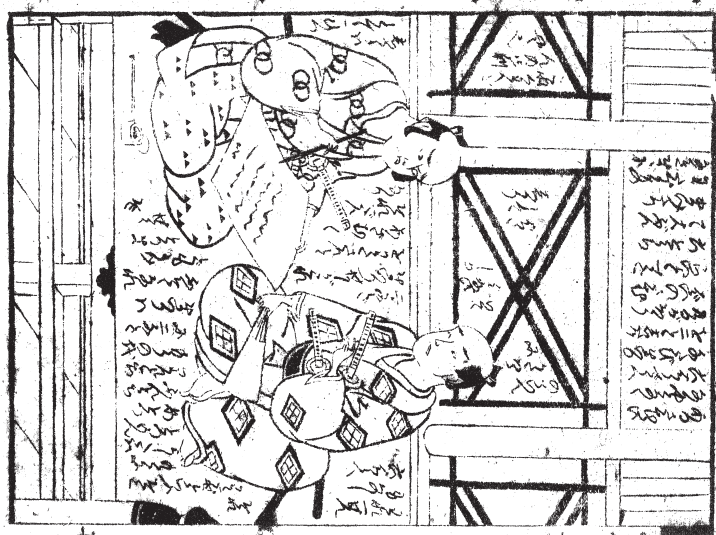
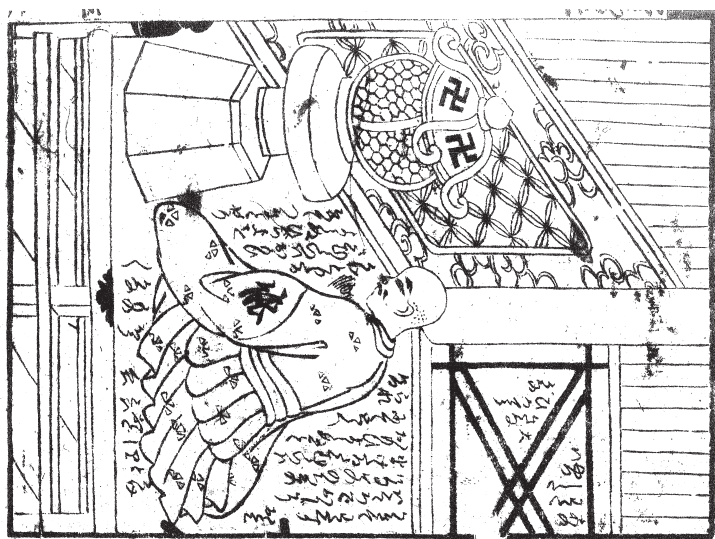
加賀文庫本は替表紙（縹色無地）だが、原題簽を有する（上巻の絵題簽、下巻の外題簽・絵題簽。中巻は欠く）。料紙
が紅白の組み合わせなので、再摺本と推定される。

(二一表)

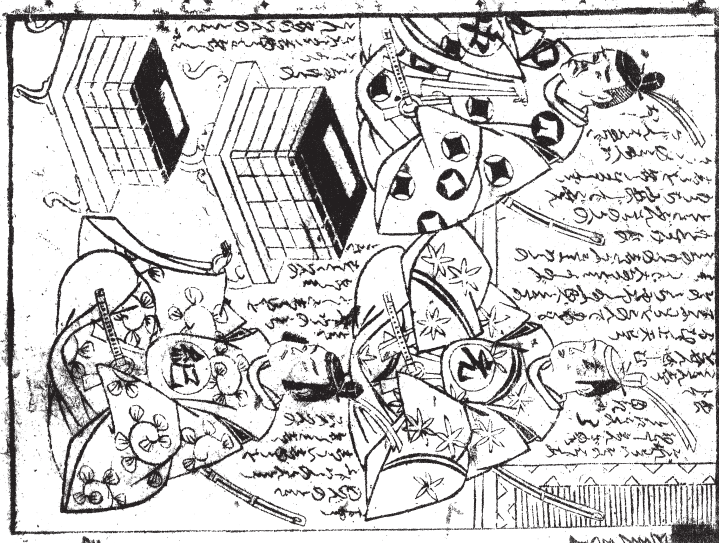
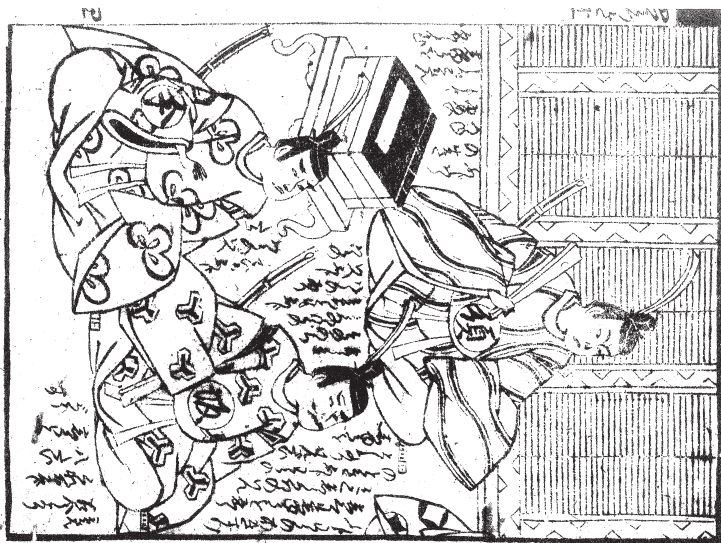




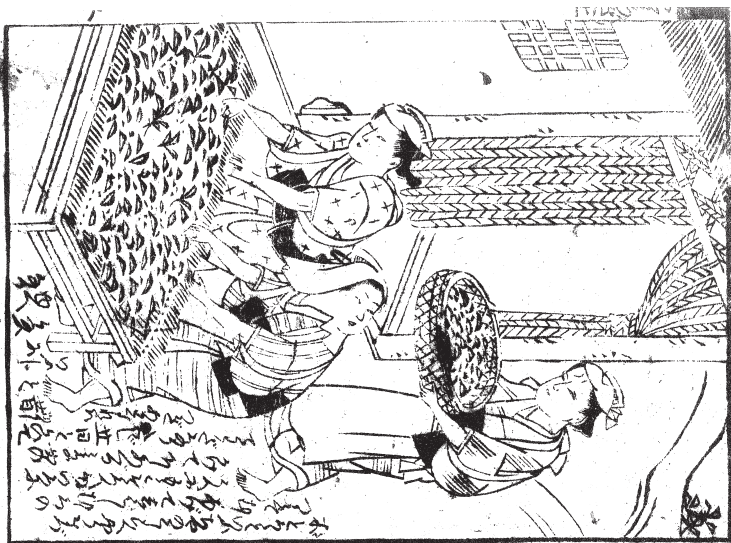
(二丁裏・二丁表)



(二) 裏・三(表)

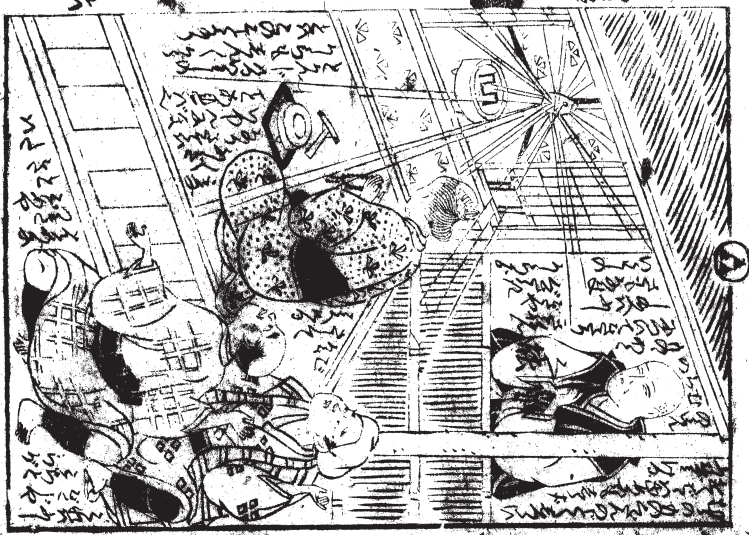


(三丁裏・四丁表)



(四丁裏・五丁表)

(六十表)



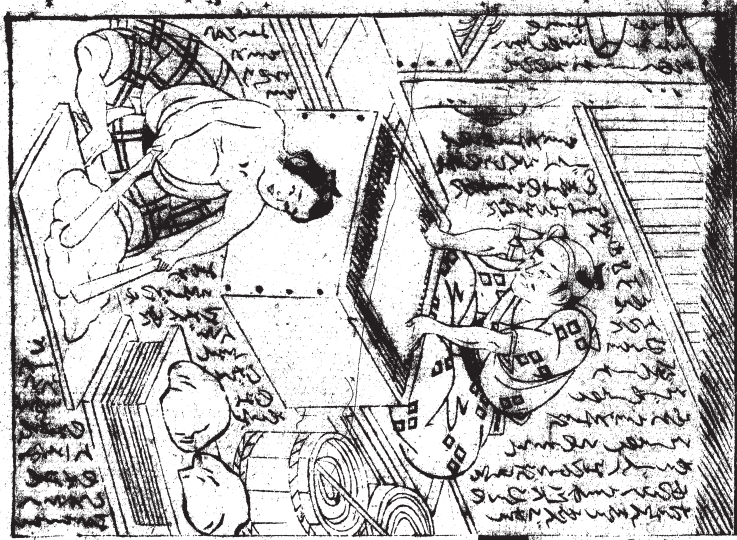
(五十裏)



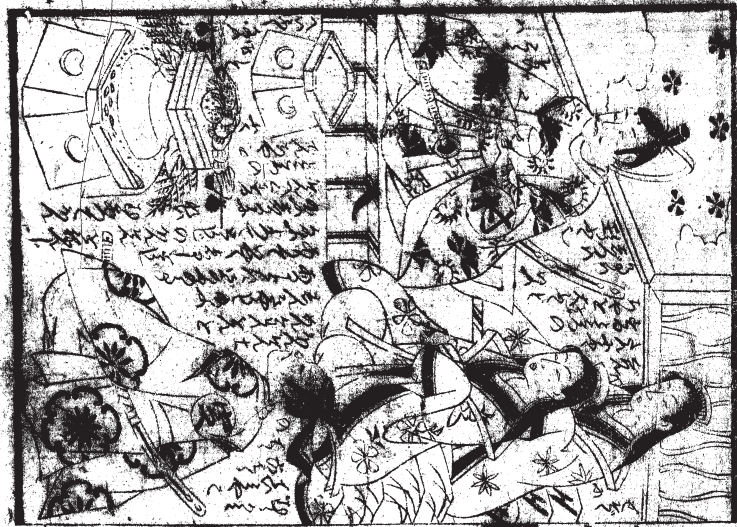
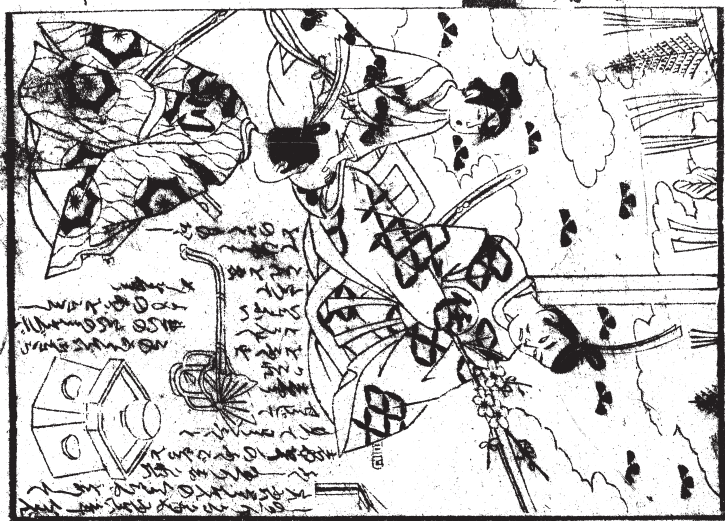
(六丁裏・七丁表)



(七十裏・八十表)

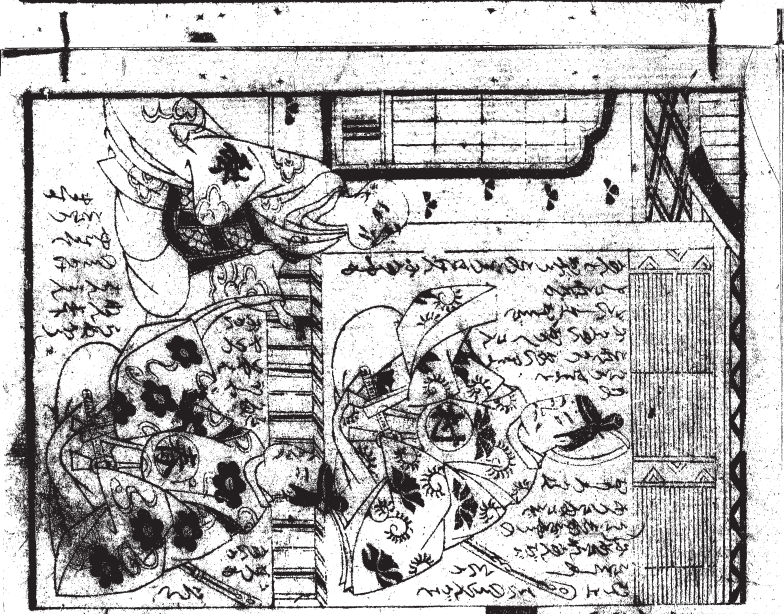


(八丁裏・九丁表)

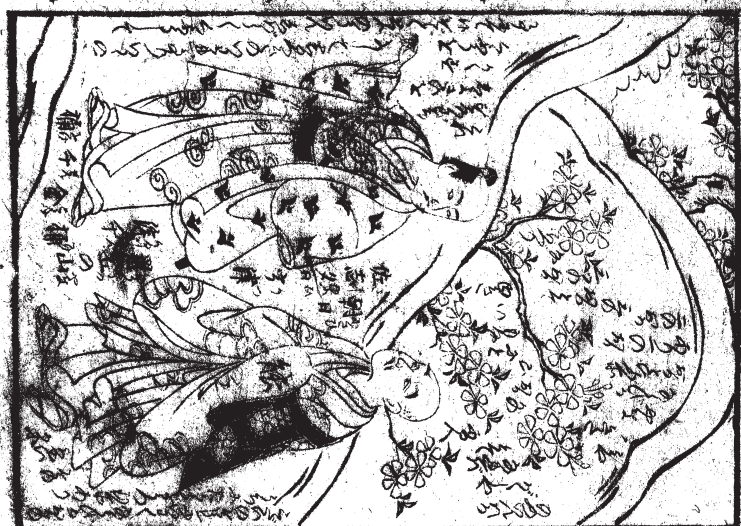


(九丁裏・十丁表)

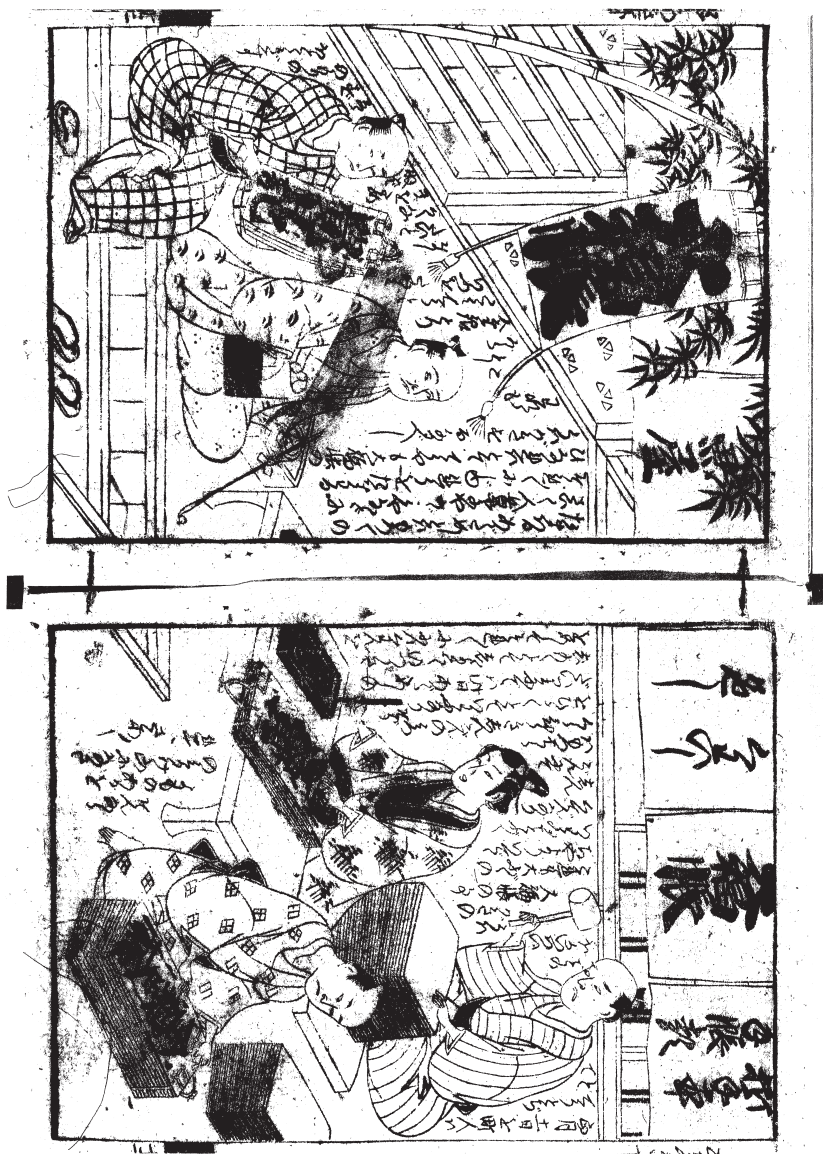
(十二表)



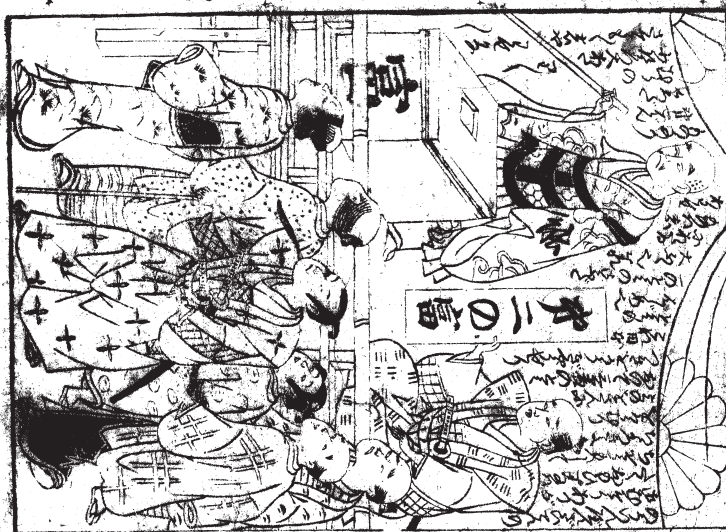
(十二裏)



(十二表・十二裏)



(十二・裏・十三表)



(十三裏・十四表)



(十四丁裏・十五丁表)

